慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディドロとメルシェ十八世紀パリ市民生活の断面：「ラモーの甥」の一節をめぐって
Sub Title	Quelques aspects de la vie parisienne au XVIIIe siècle : Diderot et Mercier
Author	原, 宏(Hara, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.241(54)- 254(41)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0254

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディドロとメルシエ
十八世紀パリ市民生活の断面

—「ラモーの甥」の一節をめぐって—

原　　宏

「ラモーの甥」の一節の，片言隻句から，L．S．メルシエの「タブロード・パリ」の中の，パリ市民生活に関する文章を連想し，メルシエから得た知識の助けを借りて，ディドロがその一節で用いている表現について考えてみること。それが本稿の目的である。ディドロとメルシエの比較研究ではなく，ただその双方に目を配ったエッセイである。

メルシエは，「ラモーの甥」の主人公のモデルとなった男と識り合い，「タブロー」の中で，「ラモー」という一章を書き残しているが，もちろん，ディドロの名作を読んでいる可能性は全くない。メルシエの書き残したラモーの甥の肖像をディドロのそれと比較するのが目的ではないので，ただ，ラモーが，一切を「咀嚼 mastication に還元する」（XII巻．p. 182）奇人として記されていることだけふれておこう。空腹，食欲こそディドロのラモーの甥の中心的な関心事だからである。「タブロー・ド・パリ」（1882年～88年にかけて出版）は年代的に「ラモーの甥」の時代とはずれがあるが，その間王朝時代の市民生活にそれほど根本的な変化があったとは思われない。少くともここで取り上げる「ラモーの甥」の中の数行には，メルシエがタ「タブロー」の中で好んで扱うテーマと重なり合うものがいくつも含まれている。次の文章は，パトロンのベルタンの食卓に集って来る連中の困窮ぶりの描写である。

I　ぬかるみの町パリ

「天気の悪い時に，わしらの仲間のうちで，24ソル玉をポケットに持っ

てる奴はまったく運がいい！　朝，背中まで泥だらけになり，濡れねずみになってやって来た自分の仲間をあざ笑ったその同じ男が，夕方には同じ有様で自分のうちへ帰ってゆくという始末。誰だったか覚えていませんが，二，三カ月も前のこと，わしらのお邸の入口に店を張ったサヴオワ人と猛烈な悶着を起した奴がありましたっけ。二人の間には貸借関係があって，貸した奴は借りた奴に金を返えせといい，借りた奴は金を持っていなかったというわけ。…」（下線は筆者）

ディドロ，「ラモーの甥」平岡昇訳，岩波文庫 p. 90. *Le Neveu de Rameau* J. Fabre 版 (Libraire Droz) p. 62.

「天気の悪い時に…」。パラグラフ全体の状況設定となっている。その後に続く文章はみな，雨が降ったことの結果として，ラモーやラモーの同類に生じる事態である。

次の「24ソル玉…」というのは，辻馬車の法定料金のことであるから，ベルタンの食卓に集って来る連中は，雨の日に辻馬車も拾えない者が多いということになる。従って，この第一行の文章は，二つの問題を含んでいる。つまり，雨の日と馬車が，市民生活の中でどんな意味合いを持っていたか，とりわけ，ラモーのように貧窮にあえぎながらも，なお社会的上昇志向を捨てきれないでいる人々にとって，どんな関わりがあったのかということである。

a.　雨の日のパリ　雨の日のパリの路がひどいぬかるみになったことについてふれている作家は珍らしくないかもしれない。しかし批評の対象として正面から取り上げ，繰返えし論じているところに，メルシエの特色がある。泥んこ路を難渋しながらたどって行く人々の様子を，「タブロー・ド・パリ」の中から，取出してみよう。

「幅の広い溝が，街路を二つに割っていることが時にあるが，しかも両側の家並みの連絡を断ち切るような具合になっている。ほんの少し夕立が降っても，ぐらぐら揺れる橋を渡さなければならない。[*1] 外国人の目を楽しませるものの中で，パリっ子が，泥んこの溝を……，白靴下に金モールの上着姿でまたぐか飛びはねるかしている様子，うす汚い通りをつま先立ち

で駆けたり，タフタのパラソルの上に樋(とい)から滝の如く流れ落ちる雨を受けている光景に優るものは何もあるまい。[*2] フォーブール・サン・ジャックから，フォーブール・サン・トノレまで昼飯を食べに行こうなどと企てた者は，食欲もなくさせるような動物の糞や屋根〔からの落下物〕をよけながら，どれほど飛びはねなければならないことか！　泥また泥，べっとりとした車軸，なんとたくさんの障害を避けねばならないことか！…」
(「タブロー・ド・パリ」Ⅰ巻　p. 120-121「溝」，拙訳，「日吉論文集30号」p. 79～80)

*1　その「橋」を渡すのは後で問題になる靴みがきの仕事らしい。「樋から流れ落ちる水でふくらんで，幅広い溝が出現する。靴みがきが，長い露地から車付きの渡り板を持ち出してくる。かつらの男は，このぐらぐら揺れる，すべり易い橋を渡り，よろめき，ずぶ濡れになりながらも立ち直り，危機を脱れる。すると，靴みがきは男の後を追いかけて，渡り賃3ドニェを再び要求する。…」(「タブロー・ド・パリ」Ⅴ巻，P.130.「お下げのかつら Perruque à trois marteaux」拙訳．前掲書 p. 113～114 註21)

*2　樋から落ちる雨水のすざまじさについても方々で語られているが，特にそれを表題にした一章がある。(XI巻P.50～54「雨樋」)樋からの雨水は，「通行人めがけて勢よく飛び出し，はね上り，落下する。奔流は滝となり，その滝はたがいに交り合う。落下する雨水のために，屋根の上から，瓦の破片だの，漆喰だのが流れ落ちてくる…頭上に注意！　頭に穴のあく危険ありだ…」，もちろん「タフタのパラソルなど穴をあけてしまう…」(XI. P. 50)

要するに，メルシエの描くところでは，通行人は，頭上の雨樋から落下する滝のような雨水，足元の溝からあふれ出る泥水に悩まされなければならないのであるが，おまけに衣服を汚すパリの街の泥は，「台所から流れ出る水のために」臭くて，腐蝕性があり，衣服をいためる。(Ⅰ巻 p. 213～214. 拙訳，前掲書 p. 105)

また，雨の日でなくても，うっかりしていると，道路清掃人夫に泥を浴びせられる危険もある。(「彼らのそばを通るとき，決して油断してはならない。彼等は君など眼中にないし，君のことなど気にもとめず，こってりとした泥をまるで聖水でもあるかのように，勢良く〔シャベルで汚物運

搬車に〕ほうりこむ。道路は掃除するが，通行人に泥んこを浴びせないようにという命令は受けていないのだ。」（V巻 p. 326.「道路清掃人夫 boueurs」）

ここでディドロの先の一節の最初の文章，「天気の悪い日に，24スー玉を持っている奴はまったく運がいい！」という文章も納得がいく。雨の日のパリは，これほどすざまじい状態になるのだから，辻馬車に乗れる者をうらやましがるのも無理はない。ところが，ラモーの同類は大低24ソルの持合わせなどないので，ぬかるみの中を，樋からの落下物を避けながら歩かねばならない。その当然の帰結が，二つ目の文章，「朝，背中まで泥だらけになり，濡れねずみになってやって来た自分の仲間をあざ笑ったその同じ男が，夕方には同じ有様で帰ってゆく」という結果になるのである。ところで，この「背中まで泥だらけになり，…Crotté jusqu'a l'echine…」という表現は，ジャン・ファーブルによれば，サン・タマンやボワロー以来，食卓から食卓へと，パリの泥んこ道を渡り歩く貧乏詩人を描くための決まり文句であったらしい。（«*Le Neveu de Rameau*» Ibid. p. 207. note 215. 参照）決まり文句になるぐらい，雨の日にパリの町を歩けば，「背中まで泥だらけになる」ことは当り前のことだったのである。

では，そんな姿をした同類を見て，なぜ「あざ笑う」のだろうか？　それに対する答えを探す前に，少し傍道にそれて，雨の日のパリにまつわることを少し考えてみたい。

雨の日のパリの町がそんなにひどいのなら，家に引込っていればよいではないか，という疑問も起るかもしれない。しかしラモーたちは空腹にかりたてられて出て来るので，たとえメルシエの云う，「フォーブール・サン・ジャックから，フォーブール・サン・トノレまで」であっても，「たくさんの障害を乗り越え」て歩き通さねばならないのである。

次に，「濡れねずみになってやって来る」と云うが，ラモーたちは，傘ぐらいささなかったのかという疑問も起る。現に先程見たメルシエの描く人物は，いずれもパラソルをさしている。（もっとも，V巻「おさげのかつら」では，「小さな黒い布切れ」とか，「その三角形のボロ切れ」と侮

蔑的に呼んでいる。）しかし，当時の人々には，一種の見栄があって，傘をさして歩きたがらなかったようである。カラクショリの「批判的事典」によれば，「身分いやしい者と混同されたくないと思う人々は，町を散歩するとき，徒歩で行き来する輩(やから)のように見なされるぐらいなら，ずぶ濡れになる危険を冒すほうがずっとましだと思っている。なぜなら，雨傘は馬車一式を持っていないことの確実な印だからである」。（Caraccioli, *Dictionnaire critique, pittoresque et sentencieux, propre à faire les usages du siècle*, etc. Lyon, B. Duplain, 1768, In-12; Margueritte Pitsch, *La vie populaire à Paris au XVIIIe siècle*, Editions A et J. Picard et Cie, Paris, 1949. p. 56. で引用されている）ラモーたちも，見栄を張って，ぬれねずみになる方を選んだのかもしれない。

そこで，先程の，「背中まで泥だらけになってやって来た仲間」を，自分のことは棚に上げて，なぜ「あざ笑う」のだろうか，という疑問にもどろう。その姿の滑稽さのためだろうか。或いは，泥のはねをかぶった粗忽さを笑うのであろうか。多少はそれもあるかもしれないが，先ほど見たように，雨の日にパリを歩けば，そんな姿になるのは，たがいに分りきった事であると思えば，それだけではあまり答えになっていないようである。やはり，カラクショリが指摘しているような馬車にまつわるコンプレックスと無関係とは考えられない。

b　馬車と市民生活

18世紀のパリ市民にとって，自家用の馬車とは，自分がひとかどの人物であることを示す，いわば，ステータス・シンボルであった。メルシエによれば，「馬車は，成功への険しい道を歩むだれでもが，到達したいと思う目標」なのである。

「成功の第一歩を踏みしめると，軽快二輪(キャブリオレ)馬車を買いこみ，自分でそれを乗りまわす。第二歩で，二人乗り箱馬車(キャロツスクーペ)が，第三歩で旦那用の四輪馬車(キャロツス)が，それから最後に奥方用の四輪馬車が登場する。

財産がふくらんでくると，息子も自分の軽快二輪(キャブリオレ)馬車を持つようになり，その家の家令も軽快二輪馬車を持ち，やがて料理人も自分のを持つ。

そして，そういうすべての軽快二輪馬車，横暴な馬車どもは，朝，鉄面皮な召使い共の手に御されて，歩道のない街路を悪魔のように走る」
(VIII巻　p. 220「徒歩で行く」)

出世の段階に応じて馬車の名が変ってゆくのも興味深いが，まだ馬車を買えない連中には貸馬車もあった。冬のあいだ半年だけ借りるという方便もあった。(VIII. p. 231参照) 貸馬車の下が，辻馬車で，それにも乗れないのが，ラモーたちである。それも大家の召使までが馬車を乗りまわしているご時勢にである。おまけに，「歩道のない街路を悪魔のように走る」馬車こそ歩行者にとって最大の危険である。メルシエは，靴みがきが，雨の日にあふれた溝の上に渡す「橋」について次のように付加えている。

「この移動式の渡り板は，馬車が通る度に取除かれる。のろのろ渡る者こそ禍いあれだ！

その男といっしょに橋は引っ張られる。足から頭まで，馬の足がはね上げるしぶきを浴びるだけですめば，もっけの幸いだ…。」(V巻) p. 130. 拙訳，前掲書 p. 113)

歩行者に泥水のしぶきを浴びせながら通り過ぎる馬車が，ひとかどの身分の象徴なら，体じゆうにかかった泥しぶきは辻馬車も拾えない倫落の印である。それを全くうだつの上らない人間であることを示めす signe と受取って，たがいに馬鹿にし合うのである。しかし次の瞬間には，自分も同じであることに気付いて，屈辱感に沈まざるをえない。従って，三番目の文章，(「朝背中まで泥だらけになって…」) には，ラモーの屈辱の思いがひそんでいると思われる。

C　靴みがき

更にその次の3番目の文章，「お邸の入口に店を張ったサヴォワ人と猛烈な悶着を起した奴」の話も，ラモーの同類の屈辱を更に増幅している。サヴォワ人—Savoyard—とは，ここでは靴みがき—décrotteur—のことであるが，メルシエは，彼らのために一章をさき，泥の町パリには無くてならぬ有用な人々であり，自由で，独立不羈の生活を送る人々として，好意的に描いている。(VI巻 p. 1～7)

「いくらつま先き立ちして歩いても無駄だし，器用に，気を付けて歩いても，泥のはねがかからないという保証には一向にならない。……有難い靴みがきが，町角毎に面倒見のよいブラシと素早い手を差しのべてくれる。おかげて，高位の人や貴婦人のお邸に参上できる状態にしてもらえるのである。少しすり切れた衣服，着古したシャツ，うすくなったかつら位なら大目に見てもらえるが，たとえ詩人であろうと，泥のついたままの姿で訪れるようなことがあってはならないからだ。」(同前 p. 1～2)

つまり，ラモーの仲間といえども，ベルタンの邸宅に入る前には，泥を落しておくのがエチケットなのだから，どうしても門前の靴みがきの世話にならざるをえないのである。*

* ジョベール André Pierre Jaubert の「工芸事典」*Dictionnaire raisonné universel des Arts et Métiers*…Paris, P. F. Diodot jenne, 1773. —によれば，靴みがきには三種類ある。
第一は，毎日特定の場所——橋の歩道とか，四つ辻などで，仕事をする者，(décrotteurs résidents) 第二は，町を流して歩き，行き交う人を手当り次第に客にする。(décrotteurs ambulants) 第三は，どこか特定の家に専属になっている者。家具付きホテルなどで，宿泊客を得意にする。靴をみがくだけでなく，衣服の手入れをしたり，使い走りまで引受けた。 (M. Pitsch : *La vie Populaire à Paris au XVIIIe siècle*, p. 44-45参照) 問題の Savoyard は第三の部類の者か。
メルシエの説によると，ポン・ヌフに店を構える靴みがきがいちばん腕がよく，他の所では，何も知らない新米に，虎の子の白靴下を靴ずみでだいなしにされることがある。(VI巻 p. 2 参照) その靴ずみには，暖炉のすすを油でといたものが用いられた。(同前 p. 4. 参照)

その靴みがきの Savoyard と「猛烈な悶着 —un démélé violent」を起した男は，要するに，靴をみがきへの払いをためていたのだと思われるが，(「二人の間には貸借関係があって，貸した奴は借りた奴に金を返えせといい，借りた奴は金をもっていなかったというわけ。 —Ils etaient en compte courant: le creancier vouloit que son debiteur se liquidat, et celui cy n'etoit pas en fonds.) 銀行取引か，大商人の通信文にでも用いられそうな商業用語 —compte courant, se liquider, が，このふたりの

争いに用いられているのも皮肉だが，実際に靴みがきの代金はどれ位の値段だったのだろうか。メルシエによると，2リアールに固定されていた*。

* 「大昔から，四季を通じて，見世物小屋の戸口であろうと，それ以外の場所であろうと，食料品の値段が変動しようと，貨幣の名目価格の引上げがあろうと，それにかかわりなく，靴下や靴の泥を落してもらった代金として必らず2リァール支払うことになっている。」(Ⅵ. p 4)

2リアールという料金を，メルシエが記している他の物の値段と比べてみよう。庶民の女たちは毎朝牛乳売りから2～3リアールの牛乳を買う。(Ⅶ巻 p. 269.「牛乳売りの女—laitière) かんぞうを煎じた飲み物 (tisane または l'eau de réglisse)。昔はコップ2杯で1リアールだったものが，1杯3ドニエとなった。(1 denier＝⅓ liard, つまり 3 deniers＝1 liard：つまり2倍になったわけである。)「そのため，倹約家の中産階級の女たち (bourgeoises économes) は，1杯を2人で飲むようになった。」(Ⅴ巻 p. 311～312. 「かんぞう水売り vendeurs de tisane」) 水売り porteurs d'eau の運んでくる水は，バケツ2杯で，6リアール。(Ⅰ巻 p. 154. 拙訳・前掲書 p. 92「水売り」なお，ジョベールの「工芸事典」も同じ値段を記している。Pitsch，前掲書 p. 73参照) ちなみに，ダニエル・ロシュの調査によると，chambres garnies と呼ばれた木賃宿の最低のところが，一晩2ソル～4ソル，(1 sol＝4 liards＝$^{1}/_{20}$ livres) であった。(Daniel Roche «*Le Peuple de Paris*» (Aubier Montaigne, Paris, 1981. p. 125)

このように見てくると，靴みがき代2リアールは，貧乏人の支出項目としても，やはりそれほど大きなものではなさそうだ。メルシエは，水売りが一回6リアールまたは2ソルの水を，日に30回は運ぶと云っているが，そうなると彼らの日収は，6 liards×30＝180 liards＝45sols 或いは 2 sols ×30＝60sols (辞書にでている 1 liard ＝ ¼ sol ではなく，メルシエは 1 liard＝$^{1}/_{3}$ sol としている。) ということになる。つまり，靴みがき代は，水売りにさえも苦もなく払えそうな値段のように思われる。靴みがきへの末払い代金がたまって，サヴォワ人と「猛烈な悶着を起した」男の挿話も，ベルタンの食卓に群がる寄食者たちの文無し生活の戯画であるが，やはり

馬車などにはおよそ縁のない男の屈辱の姿である。

Ⅱ　メルシエにとっての馬車

他方，メルシエは，足で「タブロー・ド・パリ」を書きあげた作家であり，パリの街について語られ，描写されていることの多くは，馬車を乗りまわす人間には不可能な観察の結果である。「…私は『タブロー・ド・パリ』を書くために，あれほど走りまわったのだから，それを『私の足で』書きあげたと云うことができる。従って私は，都(みやこ)の敷石の上を軽快に，活潑，迅速に歩くことを覚えたのである。それこそすべてを見るためには，身につけねばならぬ秘訣である。…」(XI巻，p. 367 「私の足」)

従って，メルシエは，断乎として，いわば「徒歩人間」であり，歩く人々の味方であり，馬車文明の批判者である。歩行者に泥水を浴びせ，時に生命を危険にさらす，傍若無人な馬車に対する非難は，先に引用した文章の中にもみられたように，枚挙にいとまがないほど各所に見られる。

自家用の馬車を手に入れることは，先に引用した「徒歩で行く」の中で云われているように，立身出世を目指す男の第一目標であり，またその第一歩でもあった。かけ出しの医者も，田舎から出て来た小金持も，女の歓心を求める伊達男も，まっ先にすることは，馬車を手に入れることである。「優雅な馬車に乗って走れば，たちまちすべての家々の戸口が開かれ，人の目も好意的になり，地位はゆるぎないものになる。あわれな人類よ，汝らはかくの如しだ！」(Ⅷ巻，p. 232) 馬車はいわば虚飾に満ちた文明の象徴であり，こうして馬車を立身出世の芝居の大道具にしようなどと考えるのは，小利口な才子に過ぎない。「にも抱らずすべての分野において，天才人はみな歩いている。馬車には才子が乗る，しかし天才は徒歩で行く。」(Ⅷ. p. 227) メルシエは，馬車を有難がる世間の価値観を拒絶し，専ら歩きに歩いてパリを「解読」するのである。ぬかるみの道を歩いて暮しを立てている人々——靴みがき，靴直し savetier，荷かつぎ人足 portefait，水売り，牛乳売りなどさまざまな種類の物売り，行商の姿を観察する。メルシェがもっとも好意的なのはそういう路上を仕事と生活の場にする人々

である。メルシエは，断乎として歩く人々の観点から町を見る。

またメルシエの社会的政治的な観点からすれば，通行人の迷惑など眼中になく疾走する馬車は，富者の横暴，傲慢の象徴でもある。そして，行政も，法律も，パリの道路の構造も，馬車に乗る者のことしか念頭にない。メルシエは，「馬車を無慈悲に乗りまわす贅沢を非難」して更に次にように続ける。

「日頃から苦情がでているにも抱わらず，それはなんの制約も受けていない。大威張りで富者を運んで行く恐しい車輪は，改革が行なわれるのを待ち望みつつ事切れる不幸な犠牲者の血で染った敷石の上を，相も変らぬ早さで飛ばしているが，その改革も行われることはないだろう。行政にたずさわる者は，自分も四輪馬車を走らせているので，歩く者の苦情などには一顧だに与えないからである。」（I 巻 p. 118.「ご用心！ご用心！Gare！Grare！」拙訳，p. 78.）

「パリの歩道に立ってみると，民衆がそこを支配していないことが分る，歩行者には何の便宜もなく，歩道すらない。民衆は国の他の階級から分け隔てられた集団のように見える。馬車供揃えを持つ金持ちやお偉ら方は，路上で民衆をひき殺したり，不具にする野蛮な権利を持っているのだ。年に百人もの犠牲者が轍（わだち）の下で息絶える。この種の事故に対する無関心を見れば，一切がお偉方の虚飾に奉仕すべきだと信じられていることが分る。」（I 巻 20 章「ブルジョワ」p. 54　拙訳 p. 113 註 18.）

メルシエは，従って馬車文明を拒否して，ぬかるみの道をひたすら歩く。ラモーも，空腹に狩りたてられて，ベルタンのような金持の食卓目指して歩いた。しかし，きっとラモーが歩くのは，心ならずも，であって，できれば豪勢な馬車で乗りつけたかったに違いない。ラモーが，ベルタン・ユスの《ménagerie》の痛烈な諷刺画を提供するのも，このような屈辱に対する一種の復讐であろう。

Ⅲ　食　　卓

これまで問題にしてきた「ラモーの甥」の一節の前後の文章は，ラモー

がベルタンの邸宅を追われる原因となった，食事の席でのラモーの失敗談のいわば序曲である。この一節の一行前の文章と，後に続く文章とを含めて，いくつかの問題を取出してみたい。

一行前の文章，「〔ラモーの災難のもとになったアベ・ラ・ポルトは〕わしらがみんな巣から追たてられる時刻，つまり飯時にやって来やがったんです。天気の悪い時に，…」

後に続く文章，「…〔借りた奴は金を持っていなかったというわけ。〕食事が出ます。アベ〔ラ・ポルト〕が主賓で，奴は上座にすえられます。わしは入って行き，奴に気が付きます。…」

この後，ラモーが，アベ・ラ・ポルトを冷やかした冗談が，パトロンの気嫌を損ね，ラモーはベルタン家を追われる破目になるのであるが，このようなコンテクストからこれまで読んできた例の一節を読み直すと，このラモーたちのどん底生活＝飢餓生活の戯画は，ベルタン家での食事の切実さを，改らためて強調し，そこから追われることの打撃の大きさを暗示する働きをしているように思われる。そこで，このベルタン家の食卓を当時の金満家が詩人，芸術家，俳優などを，週何回か集めて食事を提供するという当時のフランスの習慣一般と関係ずけて，考えてみたい。この問題でも，メルシエがその観察と考察を提供してくれる。

(1) アベは，「飯時に à l'herue du dîner」ベルタン家へ到着し，主賓として上座に席を与えられるのであるが，そこでふたつの事に注目したい。アベ・ラ・ポルトが，飯時に現われたことと，それに対して「朝 le matin 背中まで泥だらけになり，ぬれねずみになってやって来た仲間をあざ笑ったその同じ男が，夕方 le soir には同じ有様で帰ってゆく…」という文の時の副詞 (le matin, le soir) から察すると，ラモーの同類は，一日じゆうベルタンの屋敷にたむろしているかのように見えることである。ラモーは，後の方で「わしは入って行き，奴に気付きます。J'entre, je l'aperçois.」とあるが，これは食堂に入って行ったことを云っているのであって，必ずしもその時ベルタンの家に着いたということにはならない。ラモーが，他の場所でくり返えし語っているように，食事か何がしかのお金

をもらう代りに，道化として，下僕として，パトロンと奥方にあらゆるサーヴィスをする。ユス嬢の芝居のさくらから，飼猫のお守りまで，いつでもご用を務めようと身構えているのであるから，ベルタン家に朝から晩までいるとしても不思議はない。

メルシエによると，招待を受けたとき「習慣によって定められた時間以前に姿を見せるよりも，どこかで時間をつぶすか，自宅の暖炉のそばであくびでもしている方がよいと考えられている。ひま人に見えないようにと，給仕頭が現われる2分前にやって来る。…」(Ⅶ巻 p. 293.「食卓 Table」)

このメルシエの文章から察するに，アベ・ラ・ポルトは，主賓として呼ばれただけあって，招待客の習慣に従って食事の時間の寸前に到着したわけである。それに対して，ラモーの仲間の場合，或いはラモーの場合は，常々ベルタン家に入り浸り，ご気嫌を取結んでは，いろいろな御用を務める下男のようなもので，お情けで下座の方で食事の分前にあずかるという身分なのであろう。もし，将来，アベも寄食者の仲間入りをするようになればとも角，少くとも，その日の時点においては，世間のしきたりに従って来訪したれっきとした招待客なのであろう。従って，この «à l'heure du dîner» という言葉で，ラモーとは身分が違うということが暗示されているとも推測できよう。ラモーはアベの席次に関する冗談によって，パトロンの怒りにふれるのであるが，(「ラモー，貴様は無礼な奴だ—Rameau, vous etes un impertinant.—」(p. 91.) その怒りも，それで幾分説明がつくように思われる。

(2) ところでこの「飯時 l'heure du dîner」は，メルシエによれば，18世紀の時代が下るに従っておそく，かつ食事時間も短かくなっていったようである。道路人夫，石工，石切職人などは，午前9時に昼食をとり (dîner)，地方か collèges では正午が昼食の時間であるが，パリでは，「30年前には1時に食卓についたが，今では3時半にやっと昼食になる。」(Ⅻ巻 p. 209「食事の時間」) この巻が出版されたのは1788年であるから，30年前というのは，1750年代と思われる。「ラモーの甥」の主要部分が書かれたのは1761年から数年間であると推測されているから，ベルタン家の

昼食も，1.00～2.00のあいだと考えられる。ついでに云うと，80年代の夕食（souper）の時刻は，「11時半で，晩の10時頃に客はやって来る。それは社交の時刻なのだ。」（XII巻 p. 209）

またメルシエは，食事の時間が短かくなったことに関連して次のように書いている。

「狼のようにむさぼり食う詩人は，食事の時間がものすごく短かくなったように思う。徴税請負人の家をあてにしてもだめで，連中も偉い殿様同様，食事の時間を短縮しているし，それに財政家自身もう太鼓腹はしていない。」（VII巻 p. 234） 短かくなってどの位の時間になったのかは不明だが，「出る料理が，まるでオペラの舞台装置のように，目まぐるしく入替る。」（VII巻 p. 294） とサーヴィスのテンポが早くなったことを歎いている。80年代には，ベルタンの時代と違って，幾分「合理化」され，生活のテンポが早くなり，いくらか少食になったということであろうか。

他方，メルシエは，金満家が自分の家の食卓に友人知人を招く習慣を肯定し，そこに集う「寄食者 parasites」を弁護している。（I巻 p. 176～180. 「町に出て食事をする人々 les dîneurs en ville」）

「財産も，職も，才能もない男が生きて行けるのも，都（みやこ）ならではだ。なるほど，そういう人がきわめてりっぱな市民とは云えないが，やはり，どんな男でも生きてゆかねばならない。金持を除けば，いったいだれが食欲旺盛な連中に食事をおごることができようか？… この種の人々には，好感の持てる，すばらしい話上手が，音楽家，画家，坊（アベ）さん，独り者等々がいる。…」（I巻 p. 176～177）

(3) メルシエの見解によれば，金持にとって，こういう連中を食事に招くことこそ富の最良の利用法である。「だれもが富の恩恵に平等に浴することになる。金持というものは富を見せびらかすのが好きなのだから，他人を満足させながら，自らをも満足させることになる。」（I巻 p. 179）

更にメルシエは，その食卓に集る人々を， 寄食者 parasites などと呼ぶことに反対する。「…冷酷，貧欲，利己主義が生み出した愚かな，中傷の言葉である。」ちょうど，鳥が穀物をついばむように，「徴税請負人の

家にご馳走になりに行く詩人は，食欲盛んなところを見せて，徴税請負人を喜ばせるのだから，双方共に，当然自分に帰すべきものを平等に受取ることになるではないか。…」（I．p. 180）

結論として，メルシエは，parasite という語が，「永遠に国語から抹殺されるべきである。」と考える。喰うや喰わずの者が，あり余る食べ物を抱える者の家で喰わせてもらうのは天の配剤だというのが，メルシエの parasites 弁護の論法である。

他方，阿諛追従と道化としてのサーヴィス，もろもろの屈辱とひきかえに，空腹から逃れようとするラモー。彼はやはり，「なんでもあふれるほど持っている者がいるかと思うと，そんな連中と同じようにしつこい胃袋を持ち，しかも食べるものにもこと欠く者もいる」（p. 150）世の中を歎き，「ポーズ pause」で満ちているこの世の愚かしさをパントマイムで演じてみせるのである。

メルシエの場合，食卓の提供者と空腹の詩人との関係は，相互補完的，互恵的なものとされ，一種の社会政策的な見地から肯定される。他方，ディドロはそこに，相互的な侮蔑と欺瞞の交換を見，世間一般の人間関係のモデルを見出す。（「各人はそれぞれ自分のユスとベルタンとをもっている…」前掲書 p. 152, Fabre 版 p. 105）地球上至るところで人間は，「乞食のパントマイム pantomime des gueux」を踊っている。（同前）ディドロとメルシエはこの点では，まったく異った視点に立っていたのである。

Textes

Diderot, Denis, *Le Neveu de Rameau*, édition critique avec notes et lexique par Jean Fabre, Genève, Libraire Droz, 1950

デイドロ，本田喜代治，平岡昇訳，「ラモーの甥」岩波文庫，1979年

Mercier, Louis-Sébastien, *Tableau de Paris*, Nouvelle édition corrigée et augmentée. Amsterdam, 1782-1788. in-8, 12 vol. (Slatkine Reprints. 12 tomes en 6 vol, Genève, 1979)